

[最優秀賞]・[経済同友会賞]

苦しい日々を乗り越えた先

愛知県立瑞陵高等学校 食物科3年

山本晶子



「食物科に入学したい。」と初めて両親にこの思いを伝えた時、「これからの3年間、普通の高校生の日常では想像もできないほどに、辛くて大変な生活になるかもしれないが大丈夫なのか。」と、とても心配された。しかし、食べ物が好きという強い思いと、将来の夢を絶対叶えてみせるという強い決意で、どんなことも乗り越えてみせると誓った。私には小学校3年生からの夢がある。それは、テーマパークのレストランのメニューを開発し、たくさんの人を笑顔にすることだ。きっかけは、初めて東京ディズニーランドのレストランで食事をした時、目の前に運ばれた料理の可愛らしさに感激し、思わず笑みがこぼれ、幸せな気持ちでいっぱいになったことだった。周りを見渡すと、食事をしているすべての人が皆笑顔で、とても幸せそうだった。その時から、私もこんな風に料理で誰かを笑顔にしたいと思うようになった。そのため、一早く食について学ぶことのできる食物科を目指したいと思った。しかし、入学してみると、食物科での生活の大変さは想像を絶するものだった。

食物科に入学してからの生活で最初に直面した苦難は、とにかく朝が早いことだった。地元の小学校や中学校に通学するのは違い、家から高校までは、自転車と電車を使い、その道のりは片道1時間程度かかる。さらに、調理実習がある日は、実習の準備を朝に行うため、いつもに比べ、30分早く登校しなくてはならない。今まで朝7時に起

きていた私は、5時半に起きる生活に変えることを強いられることになった。寝ることが大好きな私にとって、この生活は本当に苦痛だった。しかし、徐々にその生活にも慣れ、今では、休日でも5時半には目が覚め、早起きすることが苦ではなくなった。また、調理に携わる人は、毎朝もっと早い時間に起き、仕込みや清掃をして、美味しい料理を作ってくれていたのだと知り、あらためて尊敬の念と感謝の気持ちでいっぱいになった。

勉強の面でもたくさん悩まされた。食物科ならではの栄養、食品、食品衛生、調理などは覚えることが本当に多く、テストの度に頭がクラクラし、めまいがするようだった。だが、様々な分野から食について学んでいくうちに、新たな知識をたくさん身に付けることができ、食の奥深さを知った。勉強が楽しいと感じたのは今まで生きていて初めてのことで、自分は本当に食に関わる分野が好きなのだという事に気づかされた。

3年生になると、1、2年生の時とは比べ物にならないほど、時間に追われる日々となった。調理実習を行う日も、多い週は週に4日間あり、私の生活からゆとりのある朝と昼休みがなくなった。また、3級、2級とは桁違いにレベルの高い調理技術検定では、実際にフルコースを自分で考えることの大変さを目のあたりにした。味や見た目はもちろん、栄養バランスや食べやすさまで考え、さらに時間が限られている中で調理していると、自分がいかに未熟であるかを痛感させられた。

新たに始まった集団給食実習では、100食以上の食事を20人で作る。100人以上の健康が私たちの手にかかっていると思うと、いつも緊張する。衛生管理を徹底して行くことを通して、一人一人の責任の大きさにも押しつぶされそうになる。学校での生活で手一杯にも関わらず、家では課題研究であるお弁当を作り、包丁を握る回数が劇的に増した。こんな多忙な日々を送ることになるとは、1、2年生の自分、まして、入学する前の自分は想像もしなかった。今になってあらためて、卒業した先輩方の偉大さを実感した。

しかし、3年間の多忙な日々を通して、得ることのできたものは本当に多い。第一に、私の中で時間に対する考え方が大きく変化した。忙しいからこそ、時間の大切さ、かけがえのなさを知り、隙間時間や休日などを有効活用できるようになった。調理中、時間が押している中で、一つ先の手順を考えながら動くことの必要性を学び、それを自然と日常生活で意識するようになり、以前に比べ効率よく動けるようになった。これは、将来どんなことにも生かすことのできる私の武器になった。

第二に、知らず知らずのうちに、健康を意識するようになった。例えば、お菓子を食べる回数が減り、ジュースも飲まなくなった。食事中も食材のうまみと作り手への感謝の思いを噛みしめて食べるようになった。また、「今日はタンパク質を十分に摂れていないな」、「ビタミンをしっかり摂らなくては。」と、自分がどんな食材をどれだけ食べているのかを考えられるようになった。これもすべて、3年間学び得たことの成果である。だからこそ、食を通してたくさんの人を笑顔にすると漠然と考えていた頃とは違い、食べてくださる人が思わず笑顔がこぼれるほど美味しく、さらに笑顔がずっと続くような健康にも気を配った料理を考えられる人になりたいと思うようになった。

そして、3年間で自分がいかに多くの人に支えられているのかを気付くことができた。どんなと

きも互いに助け合い、意見を交換してきた友達。辛いことや苦しいことを共有できたからこそ、いつも最後は笑顔でいることができた。この仲間と共に食物科で成長することができたことを、私は一生誇りに思う。また、食に携わる人が世の中にはたくさんいて、見えない所で大変な努力をしていることを知り、あらためて、食べることへの感謝の気持ちを大切にしていこうと思った。そして、より一層家族の存在の大きさを思い知らされた。朝早い私のために、一緒に早起きをしてくれて、いつも丁寧に愛情を込めて、白衣にアイロンをかけてくれる母。食材を手に入れるために漁港や県外まで連れて行ってくれる父。文字にして書き出したらきりが無いほど、どんな時でも支えになってくれた。食物科に入学したからこそ、自分が周りからどれほど支えてもらい、成長できたのかを実感することができた。調理技術はもちろん、人としてどうあるべきかを学ぶことができた。

食物科での生活を振り返り、本当に食物科に進学して良かったと心から思う。そして、卒業後、夢を実現するために考えていることがある。それは、栄養学科のある大学に進学し、専門的に食について深く学ぶことだ。私は、あのディズニーランドで見た光景のように、食で老若男女すべての人を笑顔にしたい。しかし、お年寄りの方が食べやすい食事を作るためにはどのような工夫が必要であるか。アレルギーを持った人も美味しく、楽しんで食事ができるようにするためにはどうしたらよいか。すべての人を笑顔にするための知識がまだまだ不十分である。だからこそ、専門的な知識を身に付けることができ、食について深く学ぶことのできる大学に進学したいと思った。

大学に進学するにあたり、再び、

「辛くて大変な生活になるかもしれないが、大丈夫なのか」と聞かれたら、私は自信を持って「大丈夫」と言える。なぜなら、食物科で過ごした3年間でどんな時でも、私の背中を押してくれるから。